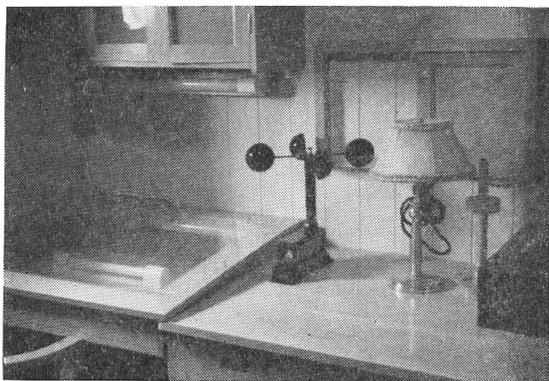


## 地方だより

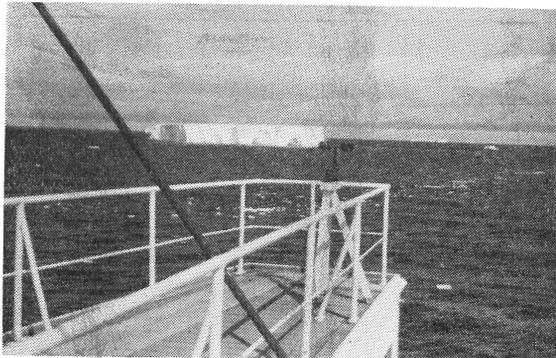
船団気象室 (日本水産捕鯨母船図南丸気象室)



松島丸気象室

世界一小さな、そして世界一広いサーヴィス範囲をもった気象台、それは私たちの船団気象室であろう。近年急激にたかまって来た、水産業、特に捕鯨関係の要求にともない、一昨年私たちは気象台から日本水産に移り、現場の操業と直接むすびついた、水産気象という新しい気象事業の分野と取組むことになった。

毎年十一月から翌年の四月にかけて、捕鯨母船図南丸 (19330トン) とともに南氷洋への永い航海をつづけるわけである。約3mに2.5mのこの空間が、観測室、予報室、気象通信室であり、2台の全波受信機のラジオテレタイプ、透写台、その他の測器類がこのせまい室内にひしめきあっている。また僅か二名のスタッフのこととて観測課長、通信課長、調査課長、予報課長、天気相談所長に図書課長を兼任し、時には台長にもなり、また小使さんやらなければならぬ。日本の港(主として大阪港)をはなれると同時に、船団廿数隻の予報センターとなり、台風を避け、赤道前線をこえ、暴風圏を突破し、南緯60



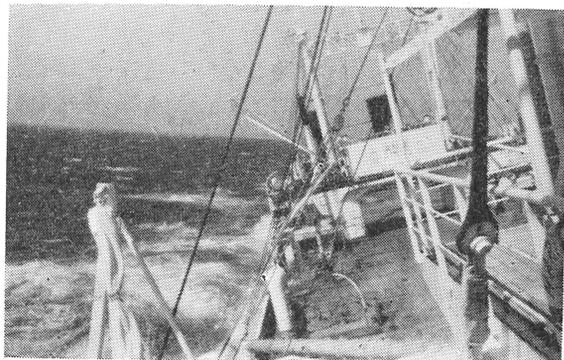
南氷洋の冰山高さ 40~50 m

~70度の捕鯨漁場に到着すると、数百浬から時には千浬以上もの広い海域にわたって毎日数回の予報や、操業、航行についての気象上の Advice がこの狭い部屋から流れ出る。操業の安全と、合理化のために、そしてこの広大な海域の解析のプランクを埋める為に、私達の業務は続けられて行く。

土曜も日曜も、そして正月すらもこの気象室にはない。少さなお重ね餅と、その上にのせられた冷凍の蜜柑だけが観測テーブルの上で新しい年が来たことを教えてくれるだけである。

作業内容は 6 hourly の南半球天気図、一日一回の上層天気図、3 hourly の局地天気図等で、受信範囲は、A X M (オーストラリア、キャンベラ) Z L M (ニュージーランド、ウェリントン)、Z Q D (フィジー、ナンディ) Z R O (南アフリカ、プレトリア) C C S (チリ、サンチャゴ) 等ほぼ南半球全域であり、北半球には見られない、南半球特有の大陸の影響をあまり受けない、大気の環流は興味深いものがある。

Planetary 波と Index, Pack Ice の変化と低気圧との関係、極大陸よりの out break 等の好個の研究材料が我々の前によこたわっている。



波長 200 m のウネリの為片舷 25° のローリングをする図南丸

今秋も間もなく私たちは南極探険の宗谷隊と前後して故国をあとに二万浬、約六カ月の航海に出るわけであるが、国際地球観測年をひかえて、今年の南氷洋はさぞかしにぎやかなことであろう。

——1956年11月出港を前  
にして——

(馬場邦彦)  
(斎藤 充)

☆ ☆ ☆

☆ ☆